

## 二工・生研，歴史の忘れ物

鈴木 弘

### 1. 第二工学部創設を取巻く熱気

千葉市の中心から東京寄り 2 km の郊外に第二工学部が創設されたのは昭和 17 年 4 月であった。当時の千葉市は人口わずか 7 万、それも陸軍の鉄道連隊や数種類の特科学校に支えられての人口である。全国の県庁所在地の都市中で、市電のないわずか 2 市中のひとつ、文字通りの地方小都市であった。しかし第二工学部誘致に上がった東京隣接の 3 県中で本郷からの距離、敷地条件、交通機関等の総合評価が最もすぐれていたのが、千葉市に決定したよしである。

二年現役海軍技術科士官の任務を終えて、開設 6 ヶ月後の二工に助教授として赴任した若僧が、設立の生の経緯を知る筈はないが、着任早々から機械科主任兼重寛九郎先生（生研への転換後の第 2 代所長）のお手伝いで、大学の運営にある程度関与した間に、二工設立の経緯に詳しい同先生から、二工の夜明け前からの事情を聞かせていただいた。

他の諸先輩先生からの伝聞も交えて、OB 座談会「生研の生い立ち」では表面に出なかった挿話を披露する。下記の内容にもし誤があれば、その責任は私の記憶の 55 年間の風化に歸するものである。

- 二工設立用地として 50 万平方メートルの麦畑をまとめて買収する手筈を整える申出は千葉県からあった。郊外とはいえ千葉市の都心から 2 km ならずであり、本郷キャンパスの全面積に近い 1 km × 500 m の好地形であって、現在では二工の跡地を引継いだ千葉大が住宅地に囲まれ好立地条件を満喫している。
- 国鉄は大学の要請に応じて、二工の門前に西千葉駅を新設した。駅前広場から道路一本を横断すれば大学の敷地に入れる。そんな交通至便の大学は他に例があるだろうか。
- 千葉市は千葉の地に永住する教授用にと、二工から 1 km ばかりの閑静な松林、しかし都市計画が実施されて道路は切開かれている地に、約 2000 坪の分譲地を用意してくれた。
- 建築が始まったのは太平洋戦争開戦前ではあったが、昭和 12 年から始まった日支事変が長びき、民需用の建設資材は入手困難な時代であった。建築用材はむろんのこと、上下水道、電気及びガス工事用の資材まで、海軍主導で軍用の資材の提供があったお陰で、木造の質素な建物ではあるにしても、一応

機能を果たすに足るものが短期間に完成したとのことであった。日本の技術水準の向上に強い期待を持つ海軍が特に積極的関心を示したよしである。

上述のような外部の一方ならぬ熱意を受ける大学側でも、萬事不如意のなか、教授陣の意気は盛であった。設立準備委員会の委員長から初代の学部長に就かれた瀬藤象二先生は、教授総会でも、事有る度毎に世界一の工学部の実現を目指そう、と激励された。第一次欧州大戦の終戦後のドイツの復興期にドイツに留学経験を持たれる先生は、仮に日本が敗戦しても、大学は残り、工学部は日本の復興の中心となるべきだ、との信念を胸中深く秘めておられたのであろう。先生はカリスマ性のある方だったので、若い私などはその熱意に強く感激して、戦後も生研の世界一への夢を持ち続けている。

### 2. 第二工学部の講座

二工の講座と学科の編成にも在来の制度に較べて改善進歩の意欲が見られる。各学科で類似の講座を個別に持つ重複を避けて、その種の講座はまとめて共通教室（学科）とした点である。従来型の工学部では、材料力学の講座は機械・土木・建築・船舶・航空などの各学科にある。二工では共通教室に数を減してまとめる。残った講座は工学系の学生の教育に必要な理学系の講座や、時代の進歩が要請する講座に引当てる。

また各学科で学問の進歩に応じて必要度が高まって来たにもかかわらず、その実現の遅れている専門は、新講座を創設する。私の金属塑性加工学の講座もその方針の恩恵により生れた新種の講座であった。機械工学科の講座は、材料力学・熱力学・流体力学と機械力学との四力学系の基礎講座と、熱機関・流体機械・工作機械などの主要機械の理論と構造との講座が並んでいるのが、明治以来の典型的な構成であった。だが、この新講座は日本最初のものであった。

二工誕生の昭和十七年には、自動制御など概念さえ知る人のない時代であった。また日本の全大学の機械工学科には物造りを学問的に取上げて講座とする考えのひとかけらもない時代であった。その時に新生二工には金属塑性加工学の講座が創設された。金属材料の塑性変形を利用して金属製品を製造する。その金属製品が人類社会のあらゆる面を支えている。

その加工法とその基礎の塑性理論と、さらにそれを実現する圧延機・プレス機・鍛造機などの研究は、機械工学科で講座として取上げられているどの機械よりも人類の社会生活には大きな影響がある。にもかかわらずこの金属塑性加工学、換言すれば物造りの講座が二工に創設されたのは、実に東京大学の明治の創設以来 70 年目であった。実はこの講座の提案者も亦瀬藤学部長であった。ドイツの第一次

大戦後の急速な経済復興の原動力が塑性加工の研究と実施とであった実状を見聞され、それ以来その実現の機会を待望しておられたのであろう。

先生の見識性と、二工発足の数年前からの金属塑性学の急進歩が、私にとっては誠に幸であった。以上は私個人の例をあげて二工の講座計画が旧套を脱して先見を取入れる方針を示したものであって、他の学科にもそれに類した前進があったとの私の観察を述べたつもりである。

### 3. 第二工学部の廃止と生産技術研究所への転換の裏面

第二工学部の創立の議された昭和16年頃は、日本の工業製品で世界の市場で競争力を持ち得たのは絹と綿との製品のみであり、近代工業国家としては欧米に較べれば、その規模は小さく、また工業技術の質の面では輸入技術に完全に依存していた。自主開発らしい物も実は模倣技術の域を出ない状態であって、欧米から見れば出来の良い途上国視されていたのかも知れない状態であった。

したがって日本の将来の地位向上と繁栄のためには、工業の質量両面の脱皮発展が基本国策である筈であって、その要となるのが大学による高度の工学教育と研究の振興であるべきであった。その必要性が戦争という非常事態によって強く現れたのであって、第二工学部の唐突と見える創設は、実は日本がいつかは実行すべきグランドデザインの一部だったのだ。後に昭和36年に全国の工学部定員増計画が実施された事実がそれを証明している。

しかし、戦後の現実の経過はそれとは違う路線を選んだ。岩波文庫に辰野隆対談集という一冊がある。著者は文学部佛文学者で随筆家として著名であるが、その一文中に、法経文の三学部には第二工学部は廃止しなければいけないとの意見があり、それを実現する力量のある南原繁法工学部教授を総長に押すこととなった、との一節がある。

経済学部の有力教授との対談中の一文であるが、二工を廃止すべき明確な論拠は書かれていなかったと記憶する。その後多くの方が表面上の理由としたのは、工学部のみ2学部在るのは総合大学としてのバランスを欠く、であり、法的理由としては二工設置の学内決定手続が正規の手続を踏んでいない、の両件であった。実質的理由として噂されたのは、総長選挙の有権者数の不均衡と、法経では戦時中に思想信條を非難され大学外へ追放された教授が数名いた

にもかかわらず、戦争協力のため二工が設置されたのはけしからん、との感情的排斥との両件であるといわれた。

しかし実質的理由といわれるものはむしろ表向きの中で主張できる性質のものではなかった。一方二工側では、座談会記事にも在る通り、戦後は新入学生を強制的に本郷・千葉両キャンパスに分けることは不可能となり、別に入試を実施すれば二工の学生の質の低下は必然である、との推測を根拠として、かなり情緒的に二工解体、一工との合体論へと動いた傾向があったのは事実である。

その推測はおそらくある程度は当たっているであろう。しかし現実の経過は、昭和23年入学26年卒業までは、従来通り新入生を両キャンパスに強制的に分ける方式が何ら混乱なく実施され、また学制の新制への切替に際して進路を閉ざされる旧制高校卒業生を、1回限り旧二工のみで受入れた昭和26年入学29年卒業生は、他大学を選ぶことなく千葉に在る旧二工を志望した人達で在るが、その後実社会で重要な地位に昇り活躍した人材を多数送り出している。また二工の卒業生として社会へ出た8回の卒業生中の、大企業の社長・副社長などの重責を担った人材の比率が、他大学や本郷の卒業生に較べて異常といえる程に高率を示している事実を分析した書が後に公刊された。

したがって、二工がそのまま千葉に残留して、本郷とは独立した入試を実施しても、教授陣と学生とが一体となって、日本一の工学部になるとの熱意に燃えれば、あるいは実質的にはその夢が実現したのかも知れない。

### 4. 生研の躍進

数年前に文部省が各大学の学部と研究所との教授・助教授の、外部組織による顕彰の受彰率（一人平均）を調査した結果によれば、生研が抜きん出て首位を示したよしである。研究業績の高い事実を示す一指標と受取って差支えないであろう。

二工から生研への新生後、あれは二工の教・助教授の失業救済機関だと、必要のない研究所といわんばかりの放言が学の内外で聞こえた。よし今に実績で日本の将来のために重要な存在であると立証して見せようと、歯を食い縛った記憶の残る我々年配の者には誠に嬉しいニュースであった。

今後一層の発展充実を期待したい。